



新古今和歌集抄

二

伊地知文庫
文庫20
311
2



314
淡古

手約市坊
の流
大井川

新古今和歌集聞書

冬弄卷六

藤原貞宗綱五



○花よ...
落葉...
ふん...
な...
えね...
よ...
ある...
追夜...
園月...
聲...
溪林風

新古今

是も海をよそに字をたづねり

藤原家経朝臣

○ちを舟とてくらしよぬ海をのまらせてくる大井川を
たせ舟は舟なりたせをいそひても舟り
なるありきむらとほそくはあらなりたうた
舟はのりよもむらとほそくおつねだきむら
り

後頼

日くわいあふ人をいふはあらぬ山の言つは
海山（あま）の言ふとて言ふはくらしくあなりひるは
むしと申へる人をあり日くわい人も言ふ

まねの言のまらりしる海山の感（かん）をいひる
まなり山中の神あふ人のありのまらりし
り

慈因

○あまらるる言よしとて神のまらりしとてしりあ
あまらるる言よしとて神のまらりしとてしりあ
あまらるる言よしとて神のまらりしとてしりあ
あまらるる言よしとて神のまらりしとてしりあ

通具

木の言ふらるる言よしとて神のまらりしとてしりあ
紅海（くわい）の言よしとて神のまらりしとてしりあ

雅詠

うはらけのうらみあはれしはなほはなほのうらみ
しらべのうらみあはれしはなほはなほのうらみ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ

秀能

あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ

祝部成茂

あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ

雪村

あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ
あはれしはなほはなほのうらみあはれしはなほ

日よみくすのさしにむちりあつるくすしり時を
心よみくすのさしにむちりあつるくすしり時を
月よみくすのさしにむちりあつるくすしり時を
星のなりとまらひくすのさしにむちりあつるくすしり時を

結目

とての海よりさしにむちりあつるくすしり時を
橋のさしにむちりあつるくすしり時を
いとくすのさしにむちりあつるくすしり時を
いとくすのさしにむちりあつるくすしり時を
いとくすのさしにむちりあつるくすしり時を

いとくすのさしにむちりあつるくすしり時を
いとくすのさしにむちりあつるくすしり時を
いとくすのさしにむちりあつるくすしり時を
いとくすのさしにむちりあつるくすしり時を
いとくすのさしにむちりあつるくすしり時を

結目

いとくすのさしにむちりあつるくすしり時を
いとくすのさしにむちりあつるくすしり時を
いとくすのさしにむちりあつるくすしり時を
いとくすのさしにむちりあつるくすしり時を
いとくすのさしにむちりあつるくすしり時を

太上天皇

いとくすのさしにむちりあつるくすしり時を

布留の神松大和の名水なり。あつらひよてまぐ
ねと松との子也。時雨ハ松をうりしけり。松ハあつら
ぬてけしむる松をあつらふやうなり。松もあつら
るめくまねゆも松もまらやまの松もあつらひ
なりしよるせり

人丸

○時雨の雨さうあつらね松のともあつらひよてまぐ
あつらよまらうとあつらひよるあつらひよる松のとも
なりし松をまらうとあつらひよる松をまらうと
あつらひよる松をまらうとあつらひよる松をまらうと

新泉寺

○松のともあつらひよる松のともあつらひよる松のとも
松のともあつらひよる松のともあつらひよる松のとも
松のともあつらひよる松のともあつらひよる松のとも
松のともあつらひよる松のともあつらひよる松のとも

源具親

今さらさらともあつらひよる松のともあつらひよる松のとも
松のともあつらひよる松のともあつらひよる松のとも
松のともあつらひよる松のともあつらひよる松のとも
松のともあつらひよる松のともあつらひよる松のとも

二條院

○松のともあつらひよる松のともあつらひよる松のとも
松のともあつらひよる松のともあつらひよる松のとも
松のともあつらひよる松のともあつらひよる松のとも
松のともあつらひよる松のともあつらひよる松のとも

新泉寺

五

新言

五

せよらふと心なれば。志くねのちんこゝん孫よ
いひけふるなり。ふふのやとハ結海なる家也がめこ
ふよらふちり。世のうさなまひのさま乃屋を。
みても。ながねらちまらと。こ句まてりいこちる。ま也
志くねのさけくさるさうと。せとちんハびつう
ささくじつこころまあふた。志くねなめ心もみぢ
りやとくこころもめぬ。まら。世のうさのまねと也

家語

○海川のうみ神よとひん志くねなまふありぬ月
月とあひしとさ。かんことさ。あつらうさり。た納
まを信たよめてのまもあう。のちらみとまあり。げくと

心神よとさるると。長夜をなびこ。あまこをさる感
悟の神のあなまら。げあまやる。月をのーさる。ねど
んすす。さねとんや。なるらうの心とさる。神よ
志くさんとり。冬の志くね。ねれつ。まひ。神也

具釈

○心神よとさるると。長夜をなびこ。あまこをさる感
悟の神のあなまら。げあまやる。月をのーさる。ねど
んすす。さねとんや。なるらうの心とさる。神よ
志くさんとり。冬の志くね。ねれつ。まひ。神也
風流なることなり

良選法師

今こそ梅の影をうらやまふに
ふりては梅の影をうらやまふに
梅の影をうらやまふに
梅の影をうらやまふに

西の

小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに

雅詮

冬の小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに

清輔録

○冬の小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに
冬の小春の月をうらやまふに

霜路既降木葉盡脱人影在地仰見明月

通具

おひよおし神のついでにさかたぬたの日のかみ
おひよおし神のついでにさかたぬたの日のかみ
おひよおし神のついでにさかたぬたの日のかみ
おひよおし神のついでにさかたぬたの日のかみ

源重之

○おひよおし神のついでにさかたぬたの日のかみ
おひよおし神のついでにさかたぬたの日のかみ
おひよおし神のついでにさかたぬたの日のかみ
おひよおし神のついでにさかたぬたの日のかみ

太上天皇

○おひよおし神のついでにさかたぬたの日のかみ
おひよおし神のついでにさかたぬたの日のかみ
おひよおし神のついでにさかたぬたの日のかみ
おひよおし神のついでにさかたぬたの日のかみ

かの国に名をききてあかしくしてさかのの山にてまつる。
 ちとたむけしめさる一急せきよらやと。神かみのぬかしうふも
 あらうらうらふに敬せい也。終さう末まの山やまにほの山やまの心こころをいれ
 させうあたらし。山やまにほの山やまにほの山やまをいれて。風情ふうせい速はやを
 よるをききてあかたり。

後成女

○おたうてをこもるふくぬきの原派はらよとあり。村むらの名なあか
 狹さか衣え物もの洗あらひ

川がはぬへきをよの原はらえん村むらよをう誰たれよとわし道みち並ならのほゆ
 ぶの原はらに結むすぬまは村むらの名なあかと誰たれよとありとあり

岩いわ好この忠ちゆう

○そののどにうらむぬく自よ自よと下した美みのわねと結むすぬまをうふ
 ころ結むすぬまの心こころなり。あまの心こころをいひよはすとけ
 てらんへきをあり。村むらの結むすぬまのよはあまの自よ自よの
 あまの心こころなり。山やまの心こころをいひよはすとけ。時とき
 結むすぬまの心こころなり。

西にし

○この國の結むすぬまの心こころなり。あまの心こころをいひよはすとけ。
 あまの心こころをいひよはすとけ。あまの心こころをいひよはすとけ。
 結むすぬまの心こころなり。あまの心こころをいひよはすとけ。
 結むすぬまの心こころなり。あまの心こころをいひよはすとけ。

一睡のそまなり。若のうねとをひし。おるすくたむら
ゆるとちかり

格致殿

○ついでに袖乃氷もじとちれどひてねお穂のまうみ
氷のじとちれどけくとほくをくれとていふも
んついでに。そ又神かみをなす。そのまをさしてほの
おんといふをねも。移るぬまも思ひあし。ゆるふら
わらやうなねも。ちやくとてさめぬれとて。あも
づくとて。あうらんとて。あうらんとて。又も。ほり
五月のよまの宿のまをさして。おのまのまうらんとて
おのまのまうらんとて。まをさして。おのまのまうらんとて。

又三助親王のひかり

春白好まはたさし。あまのまは。ほりかんとて。おのまのま
とて。おのまのま。とて。おのまのま。とて。おのまのま。とて。

家隆

○志の浦や遠さうりけ。泣らら米ておるあり。わけ乃月
さよふ。ふらにけ。や氷さん。遠さうりけ。さうら。乃月。さ
氷ひみ。さよと。おるあ。まの。の。ら。さ。ら。乃。月。の。ま
と。わ。の。ち。ら。ひ。や。米。て。お。る。と。ハ。け。乃。月。の。ま
り。さ。ら。乃。月。の。ま。と。て。お。の。ま。の。ま。と。て。お。の。ま。の。ま。と。て。

能因法師

○おのまのま。とて。おのまのま。とて。おのまのま。とて。おのまのま。とて。

奇の心もあはれなるに田の川海よりさしこむ
かきりる乃西の夕風はちりちりささる夕への路をあり
りさしりいりささる夕のさしこむ夕のさしこむ
是一歩をり歩を心なれしりる一歩をありれ也
とて骨髄よ志んて思ふにさしこむ夕のさしこむ
さしこむ夕のさしこむ先哲のさしこむ

格致殿

○月うらむむむむむむの國やまのさしこむ夕のさしこむ
さしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ
夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ
夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ

はねのつんともありさしこむ夕のさしこむ

秀能

風吹くもさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ
夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ
夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ
夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ

湯原王

○夕路をさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ
夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ
夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ
夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ夕のさしこむ

秋の雪

○ちねいふるのこころをいふてきふる庭は初雪
 けしきもよきあはれとてきふるもよき初雪
 初雪もよきあはれとてきふるもよき初雪
 日よきもよきあはれとてきふるもよき初雪
 ちねいふるのこころをいふてきふるもよき初雪
 そのなりは初雪もよきあはれとてきふるもよき初雪
 わが身とていふてきふるもよきあはれとてきふるもよき初雪
 昔もよきあはれとてきふるもよきあはれとてきふるもよき初雪
 晴もよきあはれとてきふるもよきあはれとてきふるもよき初雪

寂蓮

○ちねいふるのこころをいふてきふるもよき初雪
 田居山林のうらな家も初雪もよきあはれとてきふるもよき初雪
 しろいふるのこころをいふてきふるもよきあはれとてきふるもよき初雪
 ちねいふるのこころをいふてきふるもよきあはれとてきふるもよき初雪
 初雪もよきあはれとてきふるもよきあはれとてきふるもよき初雪
 ちねいふるのこころをいふてきふるもよきあはれとてきふるもよき初雪
 ちねいふるのこころをいふてきふるもよきあはれとてきふるもよき初雪
 ちねいふるのこころをいふてきふるもよきあはれとてきふるもよき初雪
 ちねいふるのこころをいふてきふるもよきあはれとてきふるもよき初雪
 ちねいふるのこころをいふてきふるもよきあはれとてきふるもよき初雪

藤原國房

野の家を面はあはれにしてよめる好なりさひ
こはねをいふもあはれなりや後成る言り
つらき心にして歌をよめる月乃ひりりたる後
けささる言

定家

○物もえ袖赤くも霞もあはれなり
けささる言のなまのる松なり面へくふと松
あはれいふ心や雪のうらみと心もあはれなり
あはれいふ言もなまのる言もあはれなり
家もあはれなりさひもあはれなりさひもあはれなり
なまのる言

本言

くはれもあはれなりさひもあはれなりさひもあはれなり

周

○さる人の禁の道や松あらん松の松は雪を松をさる
詩人の心もあはれなりさひもあはれなりさひもあはれなり
よまのあはれなりさひもあはれなりさひもあはれなり
と好言の松は雪のあはれなりさひもあはれなり
又説よ。さる人の心もあはれなりさひもあはれなり
あはれなりさひもあはれなりさひもあはれなり
あはれなりさひもあはれなりさひもあはれなり
と用く。さる人の心もあはれなりさひもあはれなり

赤人

○田子の浦よおのそとれそ白ぬの富のたよし雷ハ降り
 眼めおの神也ほとつる字よ常つね越ここもりて空あ海うみふ
 り流ながるるあなりねえ白ぬとつる三の白心もつこ
 なり一しかめよこつてたきくらんゆくとまなり世
 とひゆる雷かみなりかきひくちつさこのまなりとま心これ
 正ただ是常縁尺ゆかりなり

昔杯好忠

○冬ふゆの杜つと一人のたまよ雪ゆきあましくくんとむこ乃そ
 冬ふゆよたねうとつてむこあなり心ハ冬ふゆのうと
 と云む初冬はつふゆのう也その時ふえ人のこのう
 けえんこもささくつとるう迷まよは難たがむるなり

人のうれなるそまそ離わかの字を書也そよ本のう
 ねむ枯かの字なり本まあまそくそなり本もとま
 三さんの山の白雪しらゆきあまそて難たが一人のうはもあ
 又況いは小野このは雄高おとたか山やま道みち世よありてましくまこ
 業わざのむ月つきよるつてまねてハまそそ思おもふ雪
 ちうおてたむとまなり是ハ昔むかしのうそとれ
 ぬ人ひとなれ雪ゆきまそてまふりまなりねハ難たが別わかの
 人ひともまのうあなりまれの雪ゆきをまもむけん
 とそつり心こころのちかこなりたまよまらるるねハ
 何なにも

西行

このころいねとてふ人もあつたか
そのいねは月桂お月桂より我にきくしてとぬま
とぬとぬまをいね同様のや年のわかれ
とぬり

大納言隆幸

わろしと年やわろとあつらんひより
夕やまは道ハらんねとあつらん
ひより翁お翁とハ先陰お陰の梅り
とぬり

西の

昔更寮よりと本とつとそそりて
しー思ふとハ憲清俗お憲清俗の時と
とぬり

この世ありし時の事ならん
かねとゆつとてまをいねと
乃ゆをハてとるしや也そ
とゆり牙ハかつとのもつと
とぬる世はあつて思ひ
とぬり

後徳大寺左大臣

○このころはつと河のよきと
山川ハ水のよきとてとて海お海の事
あつたゆつとをねとをな
とぬり

川乃入よ老松かんや
とよみも年月のちや梅りあつるの成人まゆひもつる
とよみり本言り

本言

昨日のひもあつてわさるふりてくや日月世たり
年のくはると字の言のうらよ梅ねと心こころの言ことばも
あつたれと昔の言をとり入り

のち

け年とよみのわさるねて神よあらんや
ゆくとよとよとねむあつるなりうさねと神よ老の
あみの言とよとねむとねむと心こころの言とつる物也

寐蓮

○老のほとつる言をとり入れつる今ハすは乃ち
老松とよとわさる心とよとつる六束の松山波も紙とん
こつる今ハ束とつるひくよれ老のほとつるあつた
まくとつるあり

賀年卷七

仁徳天皇御年

○ちよとつる言のわりてつる糖立民のつとつるあつた
たつとつる梅うめのつとつるあつたつるあつたつる
民の福ふく系乃ちとつる紙とつる思おもひつるあつたつる

さきくハ其人家の下といふ人。春日一月十日一雨竟る
世のさうらうのまよふこそなり

待人不ち

○そいふまのすつねのまよふのまよふはまよふにまよふくあめを
はるの志がさきの上人のまよふの京極の身体キヤクノミヤダノカラダ志々の花は
流るよれんようけんと流る人老ぬ八旬ヤチマンよもあよりて
らんそつろつて神の流るまよひて流るりそく
とすなれまねま。人ヒトもあよりしむ。まよふをあひく
りまらまらるる息イキ取るまよひて上人ジョウジンのあつては
人ヒト系ケイあつて時トキのまよひてまよふるハハはあつて
まよひてまよひのまよひてまよふ世の思ひま

川むくまはまらるるのたつけまらる今ハ何ナニも思
はまらるるまよひのまよひてまよふる
よ。清息取のまよひ

あつてまよひとまよひありヤクノミヤダ。天平テンペイ之ノ終ハシり二
年正月三旨應ニシツキノササケ。紹旨ニシツキノササケ家持ケモチ作但依サツクニヨ。大藏ダイザウ改カヘ不ス勘カン卷マキ
者也モノナリとあり。花ハナぬ上人ジョウジンも古コのまよひまよふ。又マタま
よひのまよひ。後ノチ松マツはまよひの松マツと川カハむまよひて。まよひ
あつて正月ニシツキのまよひ。まよひのまよひ。まよひのまよひ。まよひ
あつてまよひのまよひ。まよひのまよひ。まよひのまよひ。まよひ

前も乃るこがめくさる方より本説をいふるよきとて
んゆるんまをいふ

後成

○山人の抄神宮の菊のあうらひはしらとて世にわゆる
流らの方ちうら流也本音よ

本のぬねくやとて流の三本のあいのいひらとて我にえん
こまきのいよ。同きやうとてぬねていひらとていひら
ふらうとてあひらとてあひらとてあひらとてあひらとてあひら

刑名記

考の傳はあつたはせとて花はさうもせよまる 那
考の直みのうらひはさうもせよまる 田人といふがたも

花の扱の色をいふ。考よんてはさうとて。花はさうとて。
いひらとていひらとていひらとていひらとていひらとていひら

探政殿

○ぬねていひらとていひらとていひらとていひらとていひらとていひら
ぬねていひらとていひらとていひらとていひらとていひらとていひら
ぬねていひらとていひらとていひらとていひらとていひらとていひら
ぬねていひらとていひらとていひらとていひらとていひらとていひら
ぬねていひらとていひらとていひらとていひらとていひらとていひら

麻蓮

まゆのねもひらとていひらとていひらとていひらとていひらとていひら
松樹子まゆはねはねはねはねはねはねはねはねはねはねはねはねはねはね

かろ。月かへるさうふをねむらむとせのなまるといふ也

清輔御后

○年経るるらの橋をこころんぬ世よなりぬ水のそれるん
まが應元年宇治とく言ひしに是時清輔出陣なり
河水久澄と云ふとらとよふれよ。名々の言ハ出来
をれども。清輔の言出陣と云ふ。みおき世の言ハ清輔
よ。清輔汗をぬぐひぬらむと云ふ。あまをぬぐ
つとも世もとて名を清輔と云ふ。清輔と云ふ。清輔
出て出されなり。言ひてしは清輔文字別りあ
らしむ。心をこころぬらむ。清輔と云ふ。清輔と云ふ
好む事者とのよしては清輔と云ふ。清輔と云ふ。清輔と云ふ

よ清輔の河をまへんをれども。道を清輔の心を清む心
とて清輔と云ふ也。今の世はとうとうの世と云ふ。清輔は
よらとの人のあくと思ひまづりて。みらよと云ふ。清輔
ぬよ。よとのとくまきなり。清輔はみ文字を執心と云
ふ。心も。年へくるといひて。あまの世よなりぬとの言
をいふと。沈思と云ふ。されも。うら川のく。うら川
と云ふ。よ。年へくる者なり。その言ハと理をつまむる言
なり。本言なり

あまの宇治の橋をなれと云ふ。名と早も年のあむら

松政殿

○ま白山郡の南一うねりふ山の藤波春をいへんと云

補陀洛の南乃岸に堂を造る今より久しき藤波
南園堂を因院に大信達し作時春日大明神の由と
云ふはさるるも藤氏の勲昌を思ふ事なるや

系主補親

わねは日御の星のひげをそのあがり乃加らるる
物日の出原を名のわねは松とよみんあつとせり
又日けをといひてく朝日のさしつりいひてく
吾らなり日かきをハ昔をいひたり。神系乃時神人
一母なるも此なり。古今におまりの山の山人と人も
あはらるるもはるるをいひてく也

権中納言兼光

○神代よりあるとややひかに長田の楯乃とるはるる
やつかともハ来ある楯をいつり楯のとも也。田と
るは今日の大嘗會了りの久くみよあまひあよ也
稻春と天照太神へ侍供けりといふも来の下也
日本記よりくはあり

哀傷奇巻八

僧正遍昭

○すゑのあまとの事や世中のなれはるるも
末の病と楯の心をいひたり。まとの志はくハもの
やを来ハわれもいひてはるるも人の言はるる

大江嘉言

あはれに桂えん人もよむの櫻はうらのまきうらま
ち年のいさううらまのうらまのうらまのうらまのうらま
い桂えん人のうらまのうらまのうらまのうらまのうらま
うらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

和歌水巻

後定はうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらま
人のうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらま
うらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらま
うらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらま
うらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

後撰集乃あり
松くはえあやうらの松風を梅くえんらよ才うらまのうらま

定家

○玉桂のうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらま
むゆいこのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらま
いさもいさもいさもいさもいさもいさもいさもいさもいさも
源のうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらま
才うらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらま
てあり。吉姫のうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらま
涙と才人のうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

何よりかゝるのこゝろなるかあり。世にわづらひて成ゆ
つらむと云くわすねあしーいかな

秋より月の清くくもるも海のたうと乃ららりあ
るに涙ねえへもこも也はあつたの心と思はれ

藤原秀能

○衣をたか今にそ人の藤衣あまを袖とちくあしーの
父秀宗身下りて乃秋言風懐回と云詠也。藤衣
二根あり。一ハ服衣。一ハ山がづるのうさうなる衣を云なり
は言ハ服衣なり。今にそ人のうさうなるよみみこの衣と袖
は月くくろくねとあまはらうあしーハ露地と云るは

太上天皇

○あまの人のかゝる人の世やしくもんゆふ人の面よさこを
雨申を常と云詠はひくねく出るるゆくくくく心ハ
世上の言常を観照と云る。世にわづらひて成ゆと云は
後のあまあり。我今をけく人の顔見はけのあまも
な。ねももく人のゆを思はるはこの夕はあまをこを
はんねも。一かあしーとあうくくく。凡そ之の及
へるはあまも。あらしらるるあまハあまあま。
あまねハあまも。あまもあまも。あまもあまも。あまもあまも。
楚襄王の夢也巫山神女見えたる。藤原朝序云く
去而辞曰妾在巫山之陽高丘之阻且為行雨暮
為行雨朝暮陽臺下且朝視之如言故為立

舊日朝雲廟（まへ）にちをりし川出多し（まへ）ふりこく（まへ）

能國法師

○あはれ人々の衆をよこすは難波の草（まへ）よ（まへ）し（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
大江（まへ）の（まへ）草（まへ）を（まへ）よ（まへ）こ（まへ）し（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
衆あはれ又うらむは國の難波（まへ）の草（まへ）よ（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）

慈回

蓬生よははれをよこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）
よこすは難波の草よし（まへ）ら（まへ）し（まへ）ら（まへ）

在原業平物語

○白鳥の鳴き声に人の心は時をたもててはるる（まへ）ふりこく（まへ）
あはれ人の心は時をたもててはるる（まへ）ふりこく（まへ）
あはれ人の心は時をたもててはるる（まへ）ふりこく（まへ）
あはれ人の心は時をたもててはるる（まへ）ふりこく（まへ）
あはれ人の心は時をたもててはるる（まへ）ふりこく（まへ）
あはれ人の心は時をたもててはるる（まへ）ふりこく（まへ）
あはれ人の心は時をたもててはるる（まへ）ふりこく（まへ）
あはれ人の心は時をたもててはるる（まへ）ふりこく（まへ）
あはれ人の心は時をたもててはるる（まへ）ふりこく（まへ）
あはれ人の心は時をたもててはるる（まへ）ふりこく（まへ）

たり。今の思ひのちこそおもくこそあり

急事歌

○おもぬの才を思ふて人の世のあはれを思ふてついでに
あはれに思ふはよるあはれなり

|| おす志を思ふ身と思へと常おもふのち六人よりあはれ
とよきうつらふはよるあはれなり人の世のあはれに
あはれに思ふ

|| おす志を思ふ身と思へと常おもふのち六人よりあはれ
とよきうつらふはよるあはれなり人の世のあはれに
あはれに思ふ

離別歌 卷九

急事歌

少くも思ふの趣よこつてよまのうらさかさめえと
すのうらさかさとハ文なるハ心ハさすつとつと
こころせよなるハ文を思ふ書と云又上書乃思ふ
思ふこころを思ふ

中納言書輔

○あはれを思ふの思ふはつらふは思ふ人ハ思ふの思ふ
ハ思ふハ思ふ別離苦乃常思ふ壞室の心却を思ふ昔
思ふお坂を思ふあはれと云思ふは思ふ人ハ思ふの思ふ
思ふと云思ふは思ふ

まり。伊勢物語は葦原の。又お坂乃園はさくしと
心ふれもたみしとるあり

あふたふけお坂のときお水も今いさらのかおさうつふしと
べきを逢坂するありり別るふかあふしとあり

かか言た法門

○あふたふけお坂のときお水も今いさらのかおさうつふしと
べきの河も老る親の七月七日へへくらくるそ
もほふまふれおむしと思ひていもの境おきて舟にの
るふとらふらふしとあり縁こころとらふ。お又字
天川とをいふこと。遠くおる心をさる思ひたふらふ
とふら何とす

別らふらうて行そと前ふ若もさふあふしと思へ
とらふ心をさる思ひたふらふとらふとらふとらふとらふ
し船中な
本方わまふ
流川と流さやうらあふれも若る船中とらふとらふとらふ
とらふ家もをさうてふあり

定家

○さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
ねんさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
月をさうての言さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
いさささうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さるるる。さねも月ハ神よあつる。つれをたへん
よまじとちさるせをさるう。たらさるく。いんま。この
みまわ。あをねるる。音。あ。か。さ。ん。よ。は。ま。ま。い。よ。と。さ。る。也
親房お下の事よ
うらふ。や。ま。さ。の。霧。を。ら。う。は。た。ね。の。巻。の。と。る。ま。は。つ
と。よ。め。る。色。を。さ。ら。ん。よ。と。ち。ほ。也

四騎旅奇卷十

元明天皇御事

○うらふの霧をの黒をねそい。あ。さ。あ。ら。の。か。く。と。も
和親三年三月菟原の宮よりなるの宮は移りまは

さる時と河よりあり 文武天皇十年菟原宮より
うら御母后元明天皇同十一年即位改元万葉之号
和親二年奈良の宮造三月菟原宮よりあり
の宮は遷幸也。う。ら。わ。は。あ。ま。さ。う。い。む。と。の。菟。河。也
菟原の宮は菟原宮とさる。れ。け。の。系。也。あ。ら。は
うらとは文武天皇の陵の事也。波。後。は。以。興。と。さ。る。也
ね。と。あ。ら。う。行。く。と。給。ひ。て。あ。う。え。と。ね。る。法。製。也
唯。唯。さ。ら。し。る。と。も。さ。ら。あ。ら。ん。

文武天皇御事

○い。ま。は。み。ね。の。松。原。さ。ら。せ。せ。ん。結。平。の。く。よ。あ。ら。御。事
天平十二年伊勢國より奉志多。い。ま。の。時。と。も。あ。り

乃ら六紀伊國をね原ハ伊勢也いもよつたんとは法統
 殿をれた林のこひくわらふとさすをり。塩干の海
 よとらつるさるぬび風系してを姉よんをぐやとの津
 まるるん

人丸

〇海のものさうもあまなかりは妹さよをれをぬハ
 ろよめとる河がうわらうとさすをり。おまよをた
 と流れたるいしをさるるむのさうとさハ
 ぐかり又山のものもあさるるむをさすむの
 しんばらとさるるむをさるるむ。霧掬のさあれとさ
 らくあられら。霧掬ハ人をさるるむ也。國も多

く流れたるいしをさるるむ

忠岑

東海のものさうもあまなかりは妹さよをれをぬハ
 さあめの中をさるるむをさるるむ。霧掬のさあれとさ
 しんばらとさるるむをさるるむ。霧掬ハ人をさるるむ也。國も多

如法殿子女

人をねらみつへやさるるむをさるるむ。霧掬のさあれとさ
 らくあられら。霧掬ハ人をさるるむ也。國も多

大綱

○櫻木を市ノまゝの屋のさびをねんふさつむ舟をくや
 甲^{つら}ハ^{つら}江^{つら}の志の世の心の波を^{つら}橋人の宿うた
 取也さねんふさつむ舟をくやめておぼろ人
 色たつとあむむつらむつら人の心あはれなる
 ともあり又一流橋宿のさびをねんふさつむ舟
 舟をくやつらむつらむつら心の世我つらぬと求
 つらむつらむつらむつら

橋為仲親

○らん人もあつた風をよつたむつらむつら
 つらむつらむつらむつら

よりあみくむつらむつらむつらむつら
 つらむつらむつらむつらむつら
 つらむつらむつらむつらむつら
 つらむつらむつらむつらむつら

後成

○立寄り又もまへ見むつらむつらむつら
 つらむつらむつらむつらむつら
 つらむつらむつらむつらむつら
 つらむつらむつらむつらむつら

定家

つらむつらむつらむつらむつら

家隆

○あまのつらき心なほわらひ月のみとて
 うらやまのまはるちをばつらふのしほは
 みるくもまたあまの白雲のうらやま
 ちかき心なほわらひあまのちかき心
 みるくもまたあまの白雲のうらやま
 なまはるちをばつらふのしほは

雅經

○あまのつらき心なほわらひ月のみとて
 うらやまのまはるちをばつらふのしほは
 みるくもまたあまの白雲のうらやま
 ちかき心なほわらひあまのちかき心
 みるくもまたあまの白雲のうらやま
 なまはるちをばつらふのしほは

揺りハ伊豆とてほしと伊豆もあまのちかき心
 うらやまのまはるちをばつらふのしほは
 みるくもまたあまの白雲のうらやま
 ちかき心なほわらひあまのちかき心
 みるくもまたあまの白雲のうらやま
 なまはるちをばつらふのしほは

藤原

○あまのつらき心なほわらひ月のみとて
 うらやまのまはるちをばつらふのしほは
 みるくもまたあまの白雲のうらやま
 ちかき心なほわらひあまのちかき心
 みるくもまたあまの白雲のうらやま
 なまはるちをばつらふのしほは

〇吉よん〜一箇のぢもいゝまふれぬ人よんの中は
いひくも宿をいひてあつ〜あり。機はりあつあつとん
ちりよん〜るまなり。夕陽ゆふひのぢか。梳かりのこ面おもてをり
〇梳人の袖そで入と梳風かぜな。おつる金かねい〜こも。存ぞん乃のまん〜
うゝゆても雪ゆきの夜よら〜もあ〜。こよひまををたのあつし

同

〇吉よん〜一箇のぢもいゝまふれぬ人よんの中は
いひくも宿をいひてあつ〜あり。機はりあつあつとん
ちりよん〜るまなり。夕陽ゆふひのぢか。梳かりのこ面おもてをり
〇梳人の袖そで入と梳風かぜな。おつる金かねい〜こも。存ぞん乃のまん〜
うゝゆても雪ゆきの夜よら〜もあ〜。こよひまををたのあつし

家語

〇吉よん〜一箇のぢもいゝまふれぬ人よんの中は
いひくも宿をいひてあつ〜あり。機はりあつあつとん
ちりよん〜るまなり。夕陽ゆふひのぢか。梳かりのこ面おもてをり
〇梳人の袖そで入と梳風かぜな。おつる金かねい〜こも。存ぞん乃のまん〜
うゝゆても雪ゆきの夜よら〜もあ〜。こよひまををたのあつし

後成女

〇吉よん〜一箇のぢもいゝまふれぬ人よんの中は
いひくも宿をいひてあつ〜あり。機はりあつあつとん
ちりよん〜るまなり。夕陽ゆふひのぢか。梳かりのこ面おもてをり
〇梳人の袖そで入と梳風かぜな。おつる金かねい〜こも。存ぞん乃のまん〜
うゝゆても雪ゆきの夜よら〜もあ〜。こよひまををたのあつし

おろしを思ふる

雅詮

○はるまきわの海の中は澄々といふるに
あはれ
海向は遠くもむすは伊勢物語に
乃澄きとて思ふ人と思ふく
あはれ
と思入るんれどおろしを思ふる

宣和以後丹後

○おろしを思ふるも
海はあはれ
雲のそとをさかぬ

よきものさかると思ふらるるも
よはらるるも又蝶の手のし書る物も
とわらわんかるとよめる言も
やーぴまも。ゆきまのそと
本をわてたてし

藤原秀能

○おろしを思ふる人
おろしを思ふる人
おろしを思ふる人
おろしを思ふる人
おろしを思ふる人
おろしを思ふる人
おろしを思ふる人
おろしを思ふる人
おろしを思ふる人
おろしを思ふる人

雁群を松よ縁あるをのかりかりよ
ゆるゆるのよそそりゆるゆるの音より松をわら

る歌

岩ねの床よあしをこころをこころや移さんと物の中
能くこころをこころをわらわらよくらや移さん
石原のまより

鴨長の

枕をこころをわらわらよくらよくらよの路の夕暮
世中本のよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
乃孫をより

民部公成苑

○みらのよくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮

宮家

よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮
よくらよのよわらわらよくらよくらよの路の夕暮

家隆

びらねと一むらさきの流るる波よちの海もつらき
 されもびらさしに梳ゆこそ一重も又海よちのわちわち
 初とらるる重の流をとり給也。重とらねらるる
 ちよよとらるるなり。波海よの流よのねとての
 ねとらるるも重の流とてなり

同

○あつよたのり人を束のねとらるるんうてけ治やまらるる
 本の中のま束のねとて。三重よありとらるる。それとら
 とら束のねとて也。それ束のねとらるるてねとらるる
 よちとらるる也

藤原歌仲約也

○あつよたのり人を束のねとらるるんうてけ治やまらるる
 本の中のま束のねとて。三重よありとらるる。それとら
 とら束のねとて也。それ束のねとらるるてねとらるる
 よちとらるる也

定家

○袖のあけさうな梳ゆの重もみ一重よちのわちわち
 源氏物語にたれとらるる
 本言
 重とらるるも重とらるるも重とらるるも重とらるるも
 重とらるるも重とらるるも重とらるるも重とらるるも

色あり橋泊ヨコは吉野のもともたるうしにたらしむやね
ねぬまゝの思ひまゝのほろろと愛ひまゝの思ひ
ちひとちひ

家隆

○まゝにねまゝの思ひ海にゆをさるの心周まらぬまゝの思ひ人まにまゝ
後本海たるは流のさくさくまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひ
とあるまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひ
あゝまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひ
まゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひ
ハ周まらぬまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひ
まゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひ

はすの園ままゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひ
まゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひ

家隆

ねまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひ
まゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひ
まゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひ

野長明

神ままゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひ
まゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひ
まゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひまゝの思ひ

家隆

○新古今の袖と人の袖とをまの指とくはらまはす
枯り人の袖とまの指とをまの袖とくはらまはす
ねどまの袖のとらふりとならり

西の

年ひけて又くゆへくとも思ふや
佐敷乃中山のまの指とまの袖とをまの袖とくはらまはす
よむかき。西の人老後よこすまの指とくはらまはす
よまれちるるまの指とくはらまはす

太上天皇

○人なほまの指とくはらまはす
人なほまの指とくはらまはす
眼お端の風景

なまの指とくはらまはす
まの指とくはらまはす
まの指とくはらまはす
まの指とくはらまはす



Handwritten Japanese calligraphy in cursive style (sōsho). The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. The characters are highly stylized and fluid. The rightmost column begins with a large character that resembles '木' (tree) or '杖' (stick). The middle column contains characters that appear to be '山' (mountain) and '水' (water). The leftmost column includes characters that look like '道' (road) and '心' (heart/mind). The overall impression is one of dynamic movement and expressive brushwork.

Vertical text on the right edge of the right page, possibly a page number or a small inscription. The characters are small and difficult to decipher, but appear to be '三十一' (31) at the top and '三十二' (32) below it.

